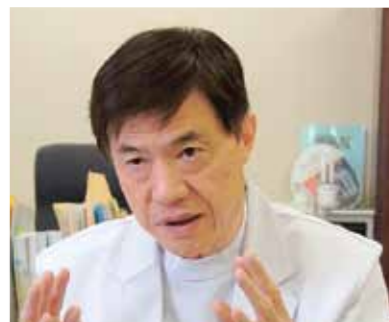


# 心臓弁膜症

## 年々増加する心臓の病気

「心臓弁膜症の患者さんは年々増加しています」と話すのは、心臓血管外科の宮本裕治主任教授。

心臓弁膜症とは、心臓の4つの部屋(右心房、右心室、左心房、左心室)の出口部分にある弁が正常に機能しなくなる病気の総称。主



心臓血管外科  
みやもと 裕治 主任教授

に、全身へ血液を送り出すため弁にかかる負担が大きい大動脈弁、僧帽弁で起こりやすい。「心臓弁膜症の原因には先天性と後天性(石灰化、変性など)があります。昔は、小児のときにかかるリウマチ熱が原因で起きることが多かったのですが、現在はリウマチ熱自体が減り、僧帽弁で狭窄が起きることは、少なくなりました。代わりに「大動脈弁狭窄症」や「僧帽弁閉鎖不全症」など加齢を原因とするものが増えているという。

## 心臓弁膜症の治療

心臓は、弁などに異常が発生しても、心筋が厚くなって血液を送る力を強めたり、心拍数を増やすなどして、全身へ送る血液量を減

らさないように順応する。このため、弁膜症があっても初期段階では自覚症状はほとんどなく、定期健診などで心臓の雑音という形で異常が見つかることが多い。病状が進行すると肥大化など心臓全体の問題になりかねないため、早期に治療することが重要となる。

また、大動脈弁の手術を受ける患者さんのうち、先天的に弁に異常がある人が4〜5人に1人程度いるという。「日本人の100人に1〜2人は、3枚あるはずの大動脈の弁尖が2枚しかないと言われています。この先天性二尖弁の方は、比較的若い40〜50歳代で手術をしなければいけないことが多く、中には20歳代で必要になる方もいます」。

動悸や息切れ、足のむくみ、疲れやすいなどの自覚症状が出ると、心臓のポンプ機能が弱まっていることが考えられる。放っておくと、脳梗塞や心筋梗塞を起こしかねないため、速やかに手術を受けるほうが良い。

### ① 大動脈狭窄症の場合

ひどい狭窄が起きている場合、

弁置換術(機能しなくなった弁を切除し、人工弁へ取り換える手術)を行う。使用する人工弁には生体弁と機械弁の2種類がある。「生体弁は耐久性が15〜20年程度であり、半永久的に使える機械弁と比べると短いので、再置換のための手術が必要になることがあります。機械弁は長持ちしますが、脳梗塞などの原因となる血栓ができやすいため、ワーファリンという強い薬を一生飲み続けなければなりません。ワーファリンは血液を固まりにくくする薬で、他の薬剤や食物との相互作用を起こしやすい、日常生活に注意が必要となる。「ワーファリンを処方できない方や妊娠を望む女性には生体弁を選択します。また、日常的にスポーツを楽しみたい方、今後大きな手術をする可能性がある方にも生体弁をおすすめしています」。

### ② 僧帽弁閉鎖不全症の場合

弁によって血液は一定方向に流れるが、加齢による変化(石灰化)や弁を支える組織の異常(変性)などが原因で、弁膜が完全に閉じることができなくなると、血液が逆

流してしまう。これを閉鎖不全といい、僧帽弁で起こりやすい。「逆流してきた血液を、再び送り出す」として心臓の仕事量が増えると、心臓が肥大し心房細動という不整脈を起こしやすくなります。慢性化すると脳梗塞のリスクが非常に高くなるので、その前に手術を行います」。この場合の手術は、弁の働きを元に戻すための弁修復術と

なる。既に病状が進行し、右心室側にある三尖弁にも異常が起きている場合は、僧帽弁および三尖弁の手術と、不整脈(心房細動)の手術の3つを同時に行うこともある。

### ③ 感染性心内膜炎の場合

抜歯などで血液中に侵入した細菌が弁に付着して引き起こす感染症を「感染性心内膜炎」といい、発

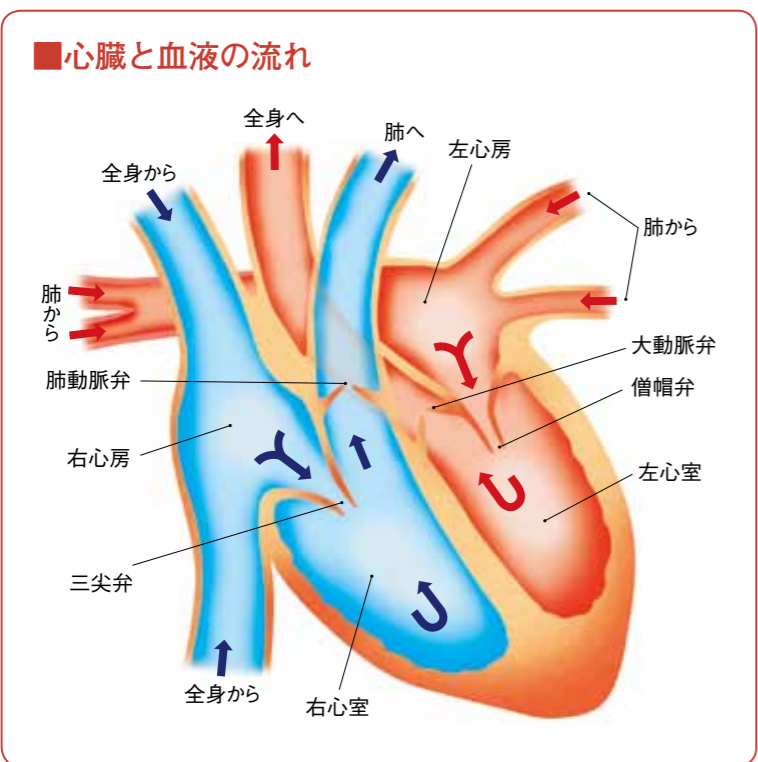
## 兵庫医科大学病院の取り組み

近年の超音波検査の進歩によって、より安全で効率的な治療を行えるようになった。兵庫医科大学病院でも導入している心臓超音波検査は、心臓の動きや血液の流れを3D(立体)でリアルタイムに確認できるため、以前と比べ手術の適切な時期を見極めることが容易になっている。体に負担がかからないため、病態が変化しやすい心臓疾患を持つ人にも繰り返し行うことができる。

一般に、心臓弁膜症の手術は胸部を真中で縦に約20cm切開して行うが、僧帽弁の手術に限っては、

右のワキの下あたりを7cm程度切開し、肋骨を切ることなく手術ができるようになってきている。患者さんへの負担も少なく、術後の回復も早い。そのため、兵庫医科大学病院でも積極的に進んでいる。

また、現在建設中の急性医療総合センターには、一般的な手術とカテーテルによる手術の両方が同時にできる「ハイブリッド手術室」が設置される予定で、完成すれば、心臓カテーテルを使った弁置換手術も可能となる。「心臓手術においても、低侵襲手術が一般化しつつあります。患者さんにかかる負担をいかに減らしていくかが、これからの課題だと思っています」。



心臓超音波検査による3D画像(左心房から見た僧帽弁)

がん

目・耳・鼻・口の病気

胃・腸・食道の病気

呼吸器の病気

骨・関節の病気

脳・神経の病気

皮膚の病気

肝臓・すい臓・胆嚢の病気

腎臓・泌尿器の病気

循環器と血液の病気

全身の病気

こころの病気

女性の病気

子どもの病気